

副科声楽教育

－アンケートに見る本校における現状と課題－

田中 樹里

1 はじめに

本稿は、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校（以下、本校とする）で「副科声楽」を8年間担当している筆者が、前稿「副科声楽教育に関する一考察」（『東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校研究紀要』第11集 平成28年3月）に続き、報告を行うものである。

前稿では本校の授業実施状況のまとめ及び平成22年度から平成26年度までに本校で実施された「授業・学校生活に関する生徒アンケート調査」の副科声楽に関する回答を基に分析を行った。その結果、生徒は「副科声楽」に好意的で、レッスン回数や曲についての要望や発表会の実施を希望したり、感想においては「楽しい」「たくさん出来るように頑張りたい」と記述したりしていた。したがって、「副科声楽」は本校の実技系授業の主要科目の一つであると認識することもできよう。

しかし、この授業は実際の授業内容及び展開がそれぞれの講師の裁量によるところが大きく、試験の評価基準は概ね統一しているものの、講師の顔ぶれは毎年異なり、考え方も様々である。そして最近では声楽の基礎的能力向上よりも、曲を歌わせたいとする意見も増えてきた。一方で、生徒の歌唱力については、以前よりもばらつきがあるのが現状である。

以上の点を踏まえ、本稿では今年度実施した2つのアンケート調査結果を報告する。1つは、副科声楽履修生徒全員を対象とした「声楽に関するアンケート」である（以下、第1アンケートとする）。これは声楽における楽器である「自分の声」と、「歌うこと」への意識、副科声楽履修のきっかけ、そして授業への準備状況と履修した感想を調査し、生徒の授業への意欲、動機づけを測ったものである。2つ目は、最近の傾向として生徒が多忙であるという実態から、副科声楽の学習をどのように定着させるか、またどのような授業アプローチが有効なのかを考察する準備として、筆者のクラスで試験的な実践をし、アンケートを行った結果である（以下、第2アンケートとする）。

2 本校における「副科声楽」の特色

そもそも副科声楽とは何か。副という漢字は、一般的に「補助的な」「副次的な」の意味で用いられる。本校における「副科」は「主専攻（主科）以外の生徒が履修する」との認識で「副科声楽」は「声楽専攻以外の生徒が履修する声楽」となる。

本校は音楽を専門とする音楽高等学校である。文部科学省の高等学校学習指導要領で、主として専門学科において開設される各教科「音楽」の声楽の学習内容は「(1)独唱」と、重唱・合唱を含む「(2)いろいろな形態のアンサンブル」と定められ、「(1)独唱」は専攻として専門的に履修するものの一つと示されている。¹

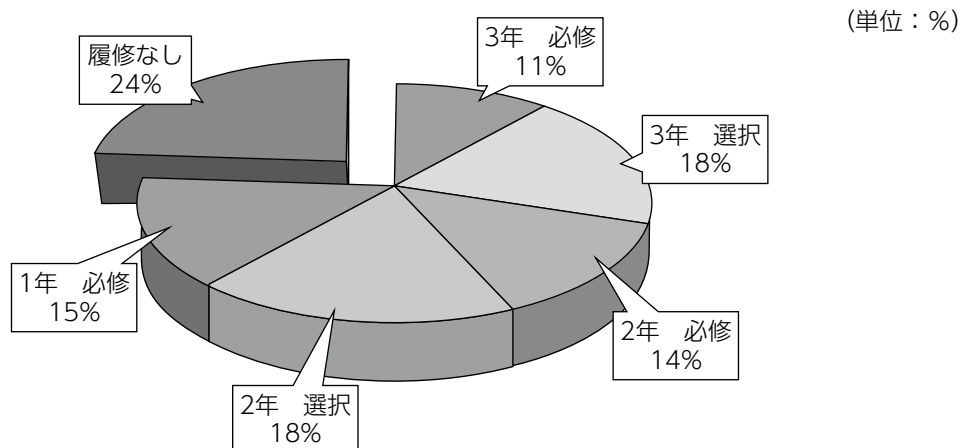
本校では、ピアノ専攻生が必修科目として1年生から履修し、ピアノ専攻生以外は2年生からの選択科目となっている。それぞれが3年間もしくは2年間、継続して履修することを原則

としている。

授業の形態は生徒一人に対し、教員一人のマンツーマンレッスンであり、20分のレッスン時間と前後の自主練習によって構成される。そして年間授業回数は約30回で、生徒一人ひとりにきめ細かい指導が行われている。

今年度の履修状況を以下、表1に示した。履修可能生徒97名のうち、76%の生徒が「副科声楽」を履修している。

表1 平成30年度副科声楽履修状況



3 第1アンケート調査実施（後掲資料1）

3-1. 方法

- ・手順 平成30年度副科声楽履修生徒へ無記名でアンケートを実施
- ・回答者 欠席者を除く67名
- ・回答者の内訳
 - 1年生 14名（男子4名 / 女子10名 / 必修14名 / 選択なし）
 - 2年生 29名（男子6名 / 女子23名 / 必修12名 / 選択17名）
 - 3年生 24名（男子6名 / 女子18名 / 必修10名 / 選択14名）
- ・質問項目
 - (1) 自分の声について（選択・複数回答可）
 - (2) 歌うことについて（選択・複数回答可）
 - (3) 副科声楽を履修した理由について（自由記述）
 - (4) レッソンのための準備について（選択・複数回答不可）
 - (5) 副科声楽を履修した感想について（自由記述）

3-2. アンケート調査結果と分析 I

必修選択別結果を表2、表3、表4に記す。最も回答者の多かった選択肢を網掛とした。自由記述とした質問項目(3)は3-3.に、質問項目(5)は3-4.に示す。

表2 質問項目(1)自分の声について

(単位：人)

		1年生		2年生		3年生		
		必修	選択	必修	選択	必修	選択	
(1)	自分の声について	好き	1		1	0	0	4
		どちらかという人喜欢	0		2	4	4	0
		好きでも嫌いでもない	5		6	5	5	8
		どちらかというと嫌い	2		0	4	0	2
		嫌い	2		0	2	0	1
		考えたことがない	5		4	3	2	0

① 検証結果

網掛は「好きでも嫌いでもない」に集中し、全体の約48%を占めた。1年生必修と2年生選択の「どちらかというと嫌い」「嫌い」「考えたことがない」が比較的多かった。

② 考察

1年生必修と2年生選択は履修1年目で、副科声楽を履修したばかりであるが故の不安や戸惑いもあるのではないだろうか。また、楽器である「自分の声」に意識が向いていないとも言える。あるいは「自分の声」が楽器であると分かっていないとも推測される。

表3 質問項目(2)歌うことについて

(単位：人)

		1年生		2年生		3年生		
		必修	選択	必修	選択	必修	選択	
(2)	歌うことについて	好き	8		9	10	5	11
		どちらかという人喜欢	6		2	2	5	3
		好きでも嫌いでもない	0		0	3	0	0
		どちらかというと嫌い	0		0	0	0	0
		嫌い	0		0	0	0	0
		簡単	0		0	1	0	1
		難しい	1		2	4	0	3
		楽しい	1		8	5	3	4
		つらい	0		0	0	0	0
考えたことがない	0		0	1	0	0		

① 検証結果

好意的な回答「好き」「どちらかという人喜欢」が多い結果となった。否定的思考の回答「どちらかというと嫌い」「嫌い」「つらい」が一人もいなかった。

② 考察

肯定的な回答が多いが、「難しい」は2年生に集中している。2年生選択では「難しい」4名に対し、「簡単」と答えた生徒もいる。この結果から生徒の個々のレベルにあった授業が行われているだろうかという疑問も生じてくる。したがって、検証の余地があるとも考えられる。なお、「歌うこと」について否定的思考の回答者が一人もいないことは注目すべき事柄である。音楽高等学校に入学して、必ずしも歌うことが好きな生徒ばかりであるとは限らない中で、この結果は大変驚きである。この内容に関しては今後研究をすすめていく必要があると感じている。

表4 質問項目(4)レッスンのための準備について

(単位：人)

		1年生		2年生		3年生		
		必修	選択	必修	選択	必修	選択	
(4)	レッスンのための準備について	毎回している	5		3	5	0	1
		時々している	7		7	7	9	11
		していない	2		2	5	1	2

① 検証結果

「時々している」が一番多い。「毎回している」は1年生必修と2年生選択が多く、「していない」は2年生選択が多かった。

② 考察

1年生必修と2年生選択は履修1年目であるのに、「毎回している」と「していない」と回答した生徒が一定数いるのが気に掛かる。副科声楽においても、他の実技系授業と同様に、準備の必要性について教員側からの指導が適切に行われているか検証の必要があろう。

3-3. アンケート調査結果と分析Ⅱ

質問項目(3)副科声楽を履修した理由について（自由記述）結果を必修選択別に以下に示す。さらに、「必修だから」「勉強になる」「歌への興味・関心」「他者からのすすめ」「その他」「無回答」に分けて表5にまとめた。

必修選択別（単位：人）

1年生必修

- ・必修だから 7
- ・勉強になると思った 4
- ・無回答 1
- ・先輩からのすすめ 1
- ・歌を歌って思い切り声を出して心の中にあるモヤモヤを発散させてすっきりとしたいということもあるし、自分の歌はどのような声なのだろうという気持ちもあった 1

2年生必修

- ・必修だから 6
- ・無回答 3
- ・歌うことが好き 2
- ・本格的に学んでみたかった 1

2年生選択

- ・勉強になると思った 12
- ・歌に興味があった 4
- ・専攻実技にいかせる 4
- ・歌が上手になりたい 3
- ・ソルフェージュ力をあげるため 2
- ・歌うことが好き 1
- ・フレーズの作り方について学びたい 1
- ・体を使って音楽を表現できるようになりたい 1

3年生必修

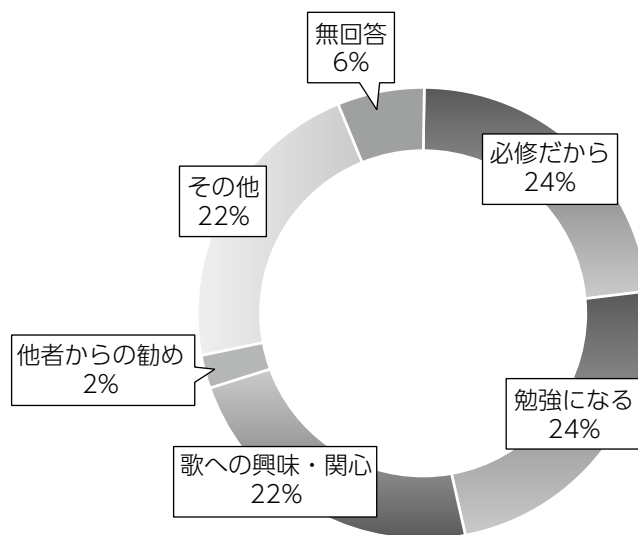
- ・必修だから 7
- ・勉強になると思った 1
- ・無回答 1
- ・歌に興味があった 1
- ・歌うことが好き 1
- ・学外で声楽を習う機会がない 1
- ・習いたい先生がいた 1
- ・専攻実技にいかせる 1

3年生選択

- ・専攻実技にいかせる 7
- ・勉強になると思った 3
- ・外国語に興味があった 3
- ・歌が上手になりたい 2
- ・歌うことが好き 2
- ・歌に興味があった 1
- ・家族からのすすめ 1
- ・ソルフェージュ力をあげるため 1
- ・フレーズ感を学びたかった 1
- ・専攻の先生から「歌うように」といわれることがあるので理解したいと思った 1
- ・歌は全ての音楽に通じているから 1
- ・皆がしていたのでなんとなく 1

表5 副科声楽を履修した理由について

(単位：%)



① 検証結果

「必修だから」「勉強になる」が全体の24%、「歌への興味・関心」「その他」が22%であった。必修生徒の履修理由の上位は「必修だから」で、選択生徒の上位は「勉強になる」「その他（専攻実技にいかせる）」である。

② 考察

必修生徒の55%が履修理由に「必修だから」を挙げており、加えてそれ以外の記述がない場合が多く、科目の意義や目的について周知が必要だと感じた。それに対して、選択生徒

の回答は大変興味深いものも多く、歌が上手になりたい、フレーズ感や外国語の習得、ソルフェージュ力の強化など具体的なものが目立ち、目標が明確である印象を受けた。

3-4. アンケート調査結果と分析Ⅲ

質問項目(5)副科声楽を履修した感想について(自由記述)結果を以下に示す。この調査により、他の講師の担当する生徒も含めた履修者全体の「副科声楽」に対する意見や取り組み、授業への意欲、動機づけを発見する手立てになるのではないかと考えた。

※同じ内容については省略をした。

① 生徒の記述

1年生

楽しいです!! 最初何をどうしたらいいかわからない状態からはじめて自分でも上達しているのが実感できている 指導がわかりやすい 予想以上に(自分の)声きたなく驚いた 歌は苦手 面白い 頑張ります 20分が短く感じる 自由で楽しい 声が通らなくて大変 中学の時より音程が安定した イマジネーション

2年生

とっても楽しい 色々な曲に取り組むことが出来る 先生が大好き 声楽曲がすきになった 音域が広がって嬉しい 難しいこともありますが全部歌えた時はとても楽しいです 思っていたより楽しかった 声が出るようになってきた 毎回楽しみです うまく声が出ない 自分の体から出す音なのに思い通りにならずイライラ 難しいなど感じています レッスン時間がもっと欲しい 先生が優しい

3年生

楽器を弾くのと一緒くらいフレーズを意識することが多く勉強になった 和声感や言葉と音楽の関わりについて学ぶことが出来る 発声がなかなかうまくいかない 難しいがレッスン毎に上達を感じる部分もある 楽しくて気分転換になる いろいろな曲が歌えて楽しいです もっといろいろな表現が出来るようになりたいです はっきりこれとはいえないが専攻実技の演奏にも変化があらわれている 歌おうと思うと声を出すことが怖くなってしまふことがある 今まで触れたことのなかった言語についても学べて楽しい オペラの事を知ることが出来た 歌うことの楽しさを改めて実感出来た 専攻以外のレッスンを受ける機会があるのはとてもありがたい 1音でも cresc. (クレッシェンド) できる! ピアノと違う感覚楽しかったです 授業をとって良かった

② 考察

無回答は1年生2名、2年生6名、3年生0名であったが、感想を見ると「楽しい」という声が非常に多く、批判的、否定的な声は少なかった。したがって、生徒側は授業内容について概ね満足しているようだ。先生が優しく好きという声もあった。授業に対して好意的なもの(楽しい、音域が広がって嬉しい等)、批判的、否定的なもの(難しい、もう少し頑張りたい等)、要望などを含む中間(レッスン時間がもっと欲しい等)と分類すると、それぞれ1年生9:0:4、2年生18:4:1、3年生24:0:0となった。

(※「難しいけれど楽しい」は好意的なものに分類した。)

3-5. 第1アンケートのまとめ

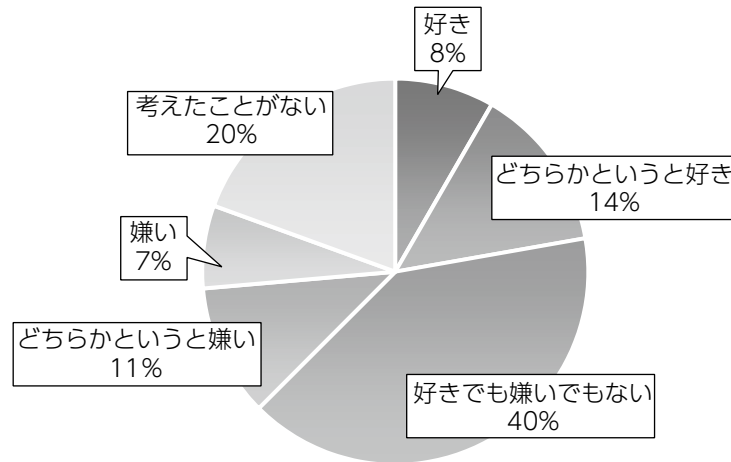
「声楽に関するアンケート」では「自分の声」と、「歌うこと」への意識、副科声楽履修のきっかけ、授業への準備状況と履修した感想を調査した。それらを整理することとする。なお、以下

の表6、表7、表8は、自由記述以外の質問の結果を全学年でまとめたものである。

まず、質問項目(1)のまとめを表6のグラフに示す。

表6 質問項目(1)自分の声について

(単位：%)

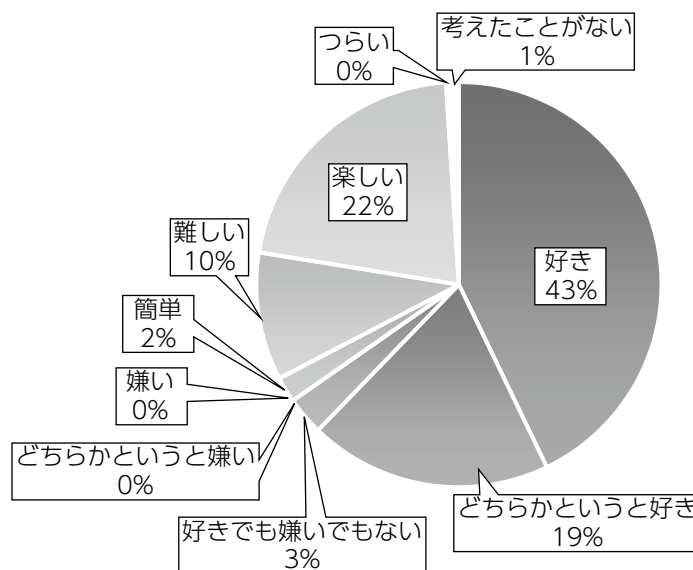


質問項目(1)では、自分の声について多くの生徒が「好きでも嫌いでもない」「考えたことがない」と回答した。全学年で見ると両者は60%を占めている。この理由は声楽では「自分の声」が楽器であることを認識していないのではないかと推測される。「声」は唯一無二の楽器であることを知り、「自分の声」はどのような「声」であるか、また継続して学習していくと、「声」はどのように成長していくのか、生徒たちがもっと興味をもってくれると願いたい。なぜなら「自分の声」に興味をもつことにより、「他者の声」にも意識が向き、アンサンブルの耳を育てることへもつながるからだ。これは学習指導要領の声楽の内容にも含まれる「(2)いろいろな形態のアンサンブル」に通じる視点であり、授業への意欲も向上すると推察される。

次に質問項目(2)のまとめを表7のグラフに示す。

表7 質問項目(2)歌うことについて

(単位：%)



質問項目(2)は本校の授業への評価に直結する重要な設問であると考えられる。「好き」「どちらかという好き」と回答する生徒が多数を占めるが、「難しい」と回答する生徒が全体の1割を占め

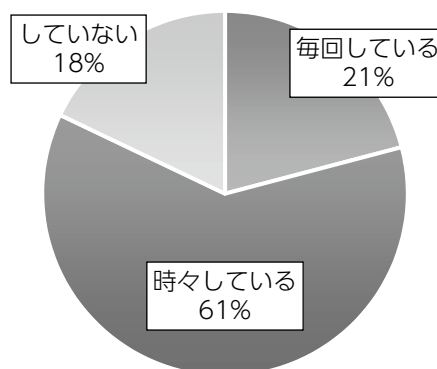
ていることに注目したい。前稿で引用したスーザン・A・オニールとゲーリー・E・マクファーソン編『演奏を支える心と科学』の音楽における動機づけを扱った章で、チクセントミハイのフロ理論において挑戦レベルと技能レベルが同程度であることが、副科声楽においても重要であると述べた。生徒が楽しいと思える内容こそが授業への意欲につながるとしたら、そのことを踏まえてマンツーマンの授業形態を活かした、より内容の濃い授業内容が提供できるのではないだろうか。

質問項目(3)では、必修の生徒の半数以上が履修のきっかけを「必修だから」と述べている。それに対して選択の生徒はより具体的な目標をもって授業を履修していることが顕著になった。なぜピアノ専攻者が必修で、それ以外の生徒は選択なのか、本校では理由は明示されていない。

ピアノ専攻者は、高等学校入学以前から合唱コンクール等、伴奏の機会が多く、歌を歌う経験は少ない傾向にある。そうした生徒たちに伴奏において重要なのは歌と合わせる呼吸であることを学ばせること、また、3年間で様々な時代、様式の声楽曲に多く触れる機会を与えることが教育的に価値があると捉えているからだと筆者は考える。特にドイツリートの実験は歌唱・伴奏共に学びが大きいものである。しかし、歌唱については初学者にとって難易度が高く、注意深く学習時期を判断する必要もある。したがって履修前に副科声楽がなぜ必修であるのか、目的が明確に示されれば、生徒がより具体的に学習効果を捉えることが出来、学習の深化が測れるのではないかと考える。また具体的な目的を持った選択の生徒たちへ、それぞれの課題に特化した内容も求められていると言える。

次に、質問項目(4)のまとめを表8に示す。

表8 質問項目(4)レッスンのための準備について



(単位：%)

質問項目(4)の調査結果は生徒のやる気を示していると言い換えることもできよう。この図を見る限り、残念であるがあまりやる気は感じられないとも捉えられる。そして授業に準備が必要であることが、生徒に伝わっているか疑問である。

質問項目(5)の具体的な回答については3-4.を参照されたい。この項目の回答から、授業は円滑に行われていると捉えることができる。声楽の分野では声によって曲のレパートリーが決まる。成長著しい高校生を厳密にそれに当てはめる必要はないが、生徒の実力に合う曲を選曲する、また基本的な楽譜の表記を尊重することは守りたい。筆者を含め教員側も初心に帰り、声楽の基礎的能力向上のための意識と教育力を高めるよう、努力することが望まれる。

4-1. 第2アンケートに至る経緯

心理学では認知を「人は『知る』ために、～（中略）～必要な情報を処理し、所定の認知過程を経て対象を知る」²と定義している。また、心理学者のナイサーは「認知は感覚器に入力された情報が変換、整理・単純化され、表現を与えられ、記憶に貯蔵され、必要に応じて再生、利用されるすべての過程と関係する」²と説いた。昨今学校教育で注目されているメタ認知は「自らの認知そのものを自覚すること」³とされている。これにしたがい、副科声楽教育においてもこのメタ認知の視点から、履修者がレッスン内容をどのように認知するかを明らかにするため、方法の1つとして試験的に毎時レッスン後に記述をさせた。高等学校における専門教育としての副科声楽についてはこれまで研究が進められておらず、心理学の分野を通しての考察が有効であるかどうかはまだわからない。しかし、授業内容をどのように認知し、それを定着させるにはどのような授業アプローチが有効なのかを考察する準備段階としてアンケートを実施することにした。

4-2. 方法

- ・手順 平成30年度副科声楽履修生徒の内、筆者のクラスの生徒へ記名ありのアンケートを実施。アンケート実施前に半期間、授業の終わりに「レッスンの内容」と「学んだこと」の記述を行わせた。
- ・回答者 15名
- ・回答者内訳
 - 3年生6名（男子0名 / 女子6名 / 履修3年目2名 / 履修2年目4名）
 - 2年生5名（男子0名 / 女子5名 / 履修2年目2名 / 履修1年目3名）
 - 1年生4名（男子1名 / 女子3名 / 履修1年目4名）
- ・質問項目
 - (1) 記入した内容を読み返してみてどのように感じましたか。
 - (2) レッスン後に記入をして変化したことがありますか。
ある人はその内容を具体的に書いてください。
 - (3) 声楽のレッスンについて、疑問や知りたいことがあれば書いてください。
 - (4) 今学期のレッスンについての感想を書いてください。

4-3. 第2アンケート調査結果と分析Ⅰ

質問項目(1)記入した内容を読み返してみてどのように感じましたか。

① 生徒の記述

同じことで注意を受けることが多かった 自分の苦手なところが分かって嬉しい その日に学んだ発声や練習が言葉で残っているのであとから思い出しやすい 課題がわかりやすい良かったことの記述が多かった もう少し練習しようと思った 連続で同じことを書いていたのもっと注意してレッスンを受けるべきだ レッスン内容のレベルが毎回上がっている試験が近づくと曲の内容に関することになってきた その時のレッスンの様子を思い出すことが出来た 抽象的な表現が多い 苦手な事柄に気づいた 出来ていないことがたくさんあるが、ちょっとした意識やコツで声が全然変わって驚いたことがたくさんあった

② 考察

質問項目(1)の結果は大きく次の2つの視点に分けられる。1点目は内容への深い理解であ

る。履修者が授業内容を考察することを通して、その日に学んだ内容、自分の出来た課題、出来なかった課題、改善点等を理解したということであろう。2点目は振り返りにつながる記述である。授業後に記述をすることで、復習の意味を含めて、次回の授業への準備につなげることが、指導として効果的であったのではないだろうか。

4-4. 第2アンケート調査結果と分析Ⅱ

質問項目(2)レッスン後に記入をして変化したことがありますか。ある人はその内容を具体的に書いてください。

① 生徒の記述

書くことで頭の中がすっきりした レッスン後に記入することで学んだことが頭の中で整理されてきちんと記憶に残すことができました 緊張感がなくなり演奏時の呼吸が変わった 気がする 音の距離を意識するようになった レッスンをただ受けっぱなしにするのではなく頭の中を一度整理することができるようになった レッスン後最低1回は復習することになるので内容を覚えやすくなりました どこをどのように注意されて次に活かすべきかが明確になった 声楽は直接体を使うので、楽器の時にもフレーズに合わせた配分を考えるようになった 毎回レッスン直後に振り返りをするので、忘れっぽい性格の自分でも定着していると感じる 次回の自分の課題や目標が明確に分かるようになった 中学生の時レッスンのふり返りノートを付けていたのでそれに似ている レッスンが終わった直後に字を書くことで、今日のレッスンで何を学び、それをどうやったら次に生かせるのかを考えられるので、自分にとって貴重な時間になった

② 考察

質問項目(2)では無回答はなく、回答者全員が今回の試みで何かしらの変化を感じたと言えよう。記述内容を見ると、「呼吸」「音の距離」「体」「フレーズ」など、個々の取り組みの内容、課題に関連するキーワードを発見することが出来る。講師は授業でこれらの課題内容を提示しているわけではない。したがって日頃から履修者本人が専攻実技等で意識をしたり、意欲的に学びや発見したりしようとしている事柄であると考えられる。この記述を行うことにより、履修者自身がそれらについてあらためて考察する機会を発見できたのではないだろうか。

4-5. 第2アンケート調査結果と分析Ⅲ

質問項目(3)声楽のレッスンについて、疑問や知りたいことがあれば書いてください。

① 生徒の記述

声量はどうしたらつくのか 家で練習するときどのような練習をしたらよいか 自分で出来る発声練習を知りたい 声楽は声が楽器だから緊張や不安が声に表れやすいと思う。緊張した時どうやって自分を落ち着かせますか vibrato (ヴィブラート)をもっとかけられるようになりたい

② 考察

質問項目(3)では半数以上が無回答であったが、回答者からは声楽の練習方法、技術的な事柄(音量やヴィブラートについて)、緊張した時どのように気持ちを安定させるかといった質問があり、声楽に対する興味と意欲が感じられた。無回答者については、疑問や興味を持っていないとも言える。声楽は他科目との複合によって様々な学びにつながることも今後伝えることにより、生徒の興味をより引き出すことが可能になるのではないだろうか。

4-6. 第2アンケート調査結果と分析IV

質問項目(4)今学期のレッスンについての感想を書いてください。

① 生徒の記述 ※一部抜粋 履修年数ごとに分けて記述を表示する。

副科声楽履修1年目

はじめの頃は緊張していたが発声法や曲に進むにつれてたくさんの方が身についた。はじめの頃に比べて声が出るようになったのが嬉しい。課題をもう一度意識して臨みたい。イメージを思い浮かべると自分の歌に変化が出て不思議だった。主専攻にも活かそうだ。今までのどのレッスンよりも具体的でわかりやすい。イメージと理論を両方習えるので上達する。なるほどと思うことがたくさんあった。発声は大切。声楽は初めてですが、意識を変えることですごく変わるので楽しい。客観的に意識することが新鮮。体全体を共鳴させることは大切。

副科声楽履修2年目

歌はすごく奥深いと思う。歌う時にはただ歌うのではなく集中していろいろ考えなくてはならないと思った。20分があつという間、音がとりやすくなってきた。ソルフェージュでも活かしている。これから難しい曲にもチャレンジしたい。最初より声が出しやすくなった。笑いの絶えないレッスンで楽しい。発声は感覚だ。副科とは思えないほど熱いレッスンだ。

副科声楽履修3年目

息が前よりも伸びるようになって楽しく歌えている。いつも注意されているところがあるので、練習の時に直せるようになりたい。良いところを活かしていくことと、素直な声で歌うことも身につけたい。

② 考察

履修年数を分けて結果を示した。1年目は1年生のピアノ専攻生と2年生のピアノ専攻生以外の選択である。授業でははじめに呼吸器官、姿勢、発声について頭で理解をしてから身体を動かしていき、回を重ねるごとに自分の身体全体が楽器であることを自然に認識できるように工夫して進めている。1年目の感想を見ると、この半期間で出来ることが徐々に増えてきたことを生徒自身も感じているようだ。2年目は2年生のピアノ専攻生と3年生のピアノ専攻生以外の選択である。1年目の履修者と比較して自分の課題が少し明確になり、挑戦したい事柄が見えてきたことがわかる。3年目になると、それらがより音楽の深みを目指したものとなり、3年間でその変化が分かる結果となった。

声の成長は身体の成長と密接に関わっているので、高等学校卒業時までに目に見えた成果は出にくい。しかし経験年数が高まるにしたがって、個々の進捗はあるものの、出来ることが増えている。声楽を学ぶことで、「自分の声」という楽器を通じて、音楽を自分のものとしていくプロセスを経験している。継続することで見えてくるもの、得られる経験は大きいものとなっていると感じる。

4-7. 第2アンケートまとめ

レッスン後の記述をはじめた頃は、20分のレッスンの中で慌ただしく、なかなかペンをとることが出来ない生徒もいた。しかし毎時レッスン後に記述を取り入れてからは、生徒のレッスンへの取り組みに変化が表れた。筆者のレッスンの特徴は、実践と理論を織り交ぜながら何度も歌唱をさせることであるが、記述を行うようになってから短い時間の中で少しでも何かを得ようとする生徒のエネルギーが増し、意欲的に歌唱に取り組むようになった。同時に筆者自身の教育力

も試されたと感じている。

音楽は目に見えないので言葉で表すことは難しいが、敢えて“書く”という行為により「内容が整理された」「歌唱の際の緊張が軽減された」「課題や目標が明確に分かるようになった」「貴重な時間になった」という声が聞かれた。記述による変化が生徒自身にも認められた。

この第2アンケートを通じて、小規模ではあるが、「音楽の学習の認知において、振り返りの記述は一つの方法として有用であること」の可能性を示すことが出来た。今後も心理学の視点から認知について考察し、学習した内容を定着させるにはどのような授業アプローチが有効なのかについて研究をすすめていきたい。

5 まとめ

履修者の技能レベルと挑戦レベルを同一にするためには、教える側の教育力が非常に重要である。筆者の考える教育力とは、履修者に今どのような課題があり、何をすれば課題を克服できるのかを的確に捉え、導く力である。筆者が本校に赴任した当初、履修者が楽しむことが出来る内容の提供を最大の目標として授業を実施した。美しいイタリア古典歌曲に親しみ楽しんで歌うことが出来れば、後々履修者自身の力で声楽から広く音楽への学びへと応用することが出来ると考えたためである。そして焦らずに生徒のペースを見守り、歌の楽しさを第一に伝えようと取り組んでいた。3年の勤務後、筆者は本校を退職し留学した。その理由は、教育に携わる者として、自分の専門性だけでは教えることへの責任が重すぎると感じたからであった。

本校は日本で唯一の国立の音楽専門の高等学校であり、専門性の高い優秀な教員が揃っている。その専門性を生徒にどのように伝えるべきか、さらに研究が進められて、教育力についても広く語られる必要を筆者は感じている。求められるべきは、音楽はすぐに習得できるものではないからこそ、そこに至る努力に理解を示すことのできる忍耐強さと、また高校生の身体と心の成長に留意しながら、丁寧な指導ができる人間的な器の大きさを兼ね備えた教員なのではないだろうか。したがって、講師の声楽初学者への教育経験年数も様々であり、個々の生徒に合った授業内容が提供出来ているのか再検証を試みる必要があるように感じている。

声楽の学びは歌の心であり、それは基礎的能力をきちんと学んでこそ、声で表現できるということを忘れてはならない。たとえば履修者が本校で副科声楽を学び、さらに声楽を専門的に学びたいと思った時に、あらためて基礎をやりなおすのではなく、一つの学びのスタートとして基礎力を身につけられる授業を提供することも副科声楽の一つの在り方ではないかと考える。筆者も教育に携わってこられた諸先輩の先生方にご指導いただきながら、教育力の向上に努力していきたい。

注

- 1 文部科学省『高等学校学習指導要領』（平成21年3月）「第3章第11節」337～340頁。
- 2 今井四郎「認知 cognition」（中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁柘算男・立花政夫・箱田裕司編『心理学辞典』有斐閣、平成11年1月）661頁。
- 3 「メタ認知 meta-cognition」（下中邦彦編『新版 心理学辞典』平凡社、昭和56年11月）658頁。

参考文献

- 文部科学省『高等学校学習指導要領』（平成21年3月）。
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説』（平成21年12月）。
- リチャード・パーンカット&ゲーリー・E・マクファーソン編『演奏を支える心と科学』（誠信書房、平成23年9月）。
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁柘算男・立花政夫・箱田裕司編『心理学辞典』

(有斐閣、平成 11 年 1 月)。

下中邦彦編『新版 心理学辞典』(平凡社、昭和 56 年 11 月)。

藤永保・仲真紀子監修 岡ノ谷一夫・黒沢香・鬘羅雅登・田中みどり・中釜洋子・服部環・日
比野治雄・宮下一博編『心理学辞典 普及版』(丸善、平成 17 年 2 月)。

海保博之・楠見孝監修『心理学総合事典』(朝倉書店、平成 18 年 6 月)。

藤永保監修『最新 心理学事典』(平凡社、平成 25 年 12 月)。

中原雅彦・志民一成「器楽専攻者の専門教育としての声楽指導の意義 一声楽のレガート奏法を
中心に一」(『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 21 集、平成 25 年)。

若林勉「声楽初学者のグループ授業における総合的・多角的取り組み」(『国立音楽大学紀要』第
50 集、平成 27 年)。

若林勉「国立音楽大学の副科声楽レッスンにおける問題点と見直し提言」(『国立音楽大学紀要』
第 51 集、平成 28 年)。

資料1 アンケート

声楽についてのアンケート

※このアンケートで得た個人情報は、研究目的にのみ利用し、それ以外には使用しません。

____年 _____ 専攻 男・女 _____

以下の質問事項について、教えてください。

1. 自分の声について

当てはまる項目に○をつけてください。(複数回答可)

好き どちらかという人喜欢 好きでも嫌いでもない
どちらかという嫌い 嫌い 考えたことがない

2. 歌うことについて

当てはまる項目に○をつけてください。(複数回答可)

好き どちらかという人喜欢 好きでも嫌いでもない
どちらかという嫌い 嫌い 簡単 難しい
楽しい つらい 考えたことがない

3. 副科声楽を履修した理由について

自由に記入してください。

[]

4. レッスンのための準備について

当てはまる項目に○をつけてください。

毎回している 時々している していない

5. 副科声楽を履修した感想について

自由に記入してください。

[]

アンケートは以上です。ありがとうございました。

資料2 記述用紙

名前 _____

① 日付②レッスンの内容③学んだことを記入してください。

① ②

③

① ②

③

① ②

③

資料3 アンケート

名前 _____

記入用紙（①日付②レッスン内容③学んだこと）を読み返しましょう。
その上で、以下の質問に答えてください。

1. 記入した内容を読み返してみてどのように感じましたか。
2. レッスン後に記入をして変化したことがありますか。
ある人はその内容を具体的に書いてください。
3. 声楽のレッスンについて、疑問や知りたいことがあれば書いてください。
4. 今学期のレッスンについての感想を書いてください。